

へっぴり三次

●高林

飯豊と高林のほぼ中程を「上高林」という。これは古い住居跡で、当時約二十戸の集落があったといわれ、百姓三次もまたこの集落の住人であった。

ところでこの三次は、愛称を「へっぴり三次」と呼ばれ、これには、次のようないわれがあった。

慶長六年九月、会津若松城主蒲生秀行は、白河支城に家老職町左近をおき、城代として当地方一帯を治めさせていた。

白河城代家老は、代々一年に四回本城の若松城へ伺候することが恒例となっていた。

ある年の暮れ、白河城代家老、町左近

は、少数の家来と夫役数人を従え、若松城主蒲生秀行への伺候を終え、カゴに揺られながら急ぎ帰城の途についた。

途中久米石（鏡石町）の村はずれにさしかかったとき、たまたま前方から供の者や夫役を伴った名のある武将のカゴと見受けられる行列に出逢った。その時、カゴとカゴとがすれ違った、ほんの瞬間、先方の夫役の一人が「ブーツ」と一発放屁した。カゴの中にあつた左近は怒ってしまい、あわや「無礼者め」と叱る寸前、当方の夫役である三次が間をおくことなく「ブブーツ」と、先方の数倍もある大音響のものを、つづげざまに力を入れ

民話 5

て二発ぶつ放した。

日は暮れかかり城代家老、町左近は、矢吹本陣にカゴをとめ宿を取った。夫役の三次は、同輩らの溜り場に控えていたが、今日の御前での放屁の一件が気にかかり、あるいは重罪のため討首かと心配のあまり、何としても涙が流れおち、やり場がなかった。

この夜、三次は城代家老の前に呼び出された。三次はもはや御手討ちの覚悟はしてはいたものの、どうにもふるえが止まらなかった。家老は満面笑みをたたえながら、「夫役、三次とはその方か、面を上げい」ハ、ハイ、三次の返事は声にはならなかった。家老は更に声をやわらげ「近う近う」と声をかけ「今日、その方の働き、余はうれしそ。敵は一発、味方は二発、しかも大筒じゃ。よく余のかたきを討ってくれて、余は満足であるぞ、ほめてつかわす」手柄として家老愛用の短刀一ふりと家老自らの酒肴を下しおかれ、三次は感激のあまり平伏、うれし涙がとめどもなくこぼれおちた。

この話が伝わるや、上高林周辺は勿論のこと、三次の名声は一段と高まり「へっぴり三次」と、名譽ある愛称で呼ばれるようになったという。

（稿者 石井寅之助）
『天栄村の民話と伝説』から

